

私の履歴書

ワクワクする目標を持つとう

赤羽たけみ 奈良県立医科大学消化器内科学講座



医師になって今年で30年が経ちました。「私の履歴書」はこの節目の年に今までの歩みを振り返る良い機会になりました。30年の間には辛いことや苦しいこと、落ち込むことなどたくさんありましたが、いつも何かワクワクするような目標を持っていたなと思うのです。若い先生方の参考になればと思いますので、最初の15年くらいの話を中心に書きます。

始まりは出会い

大学2年生の夏休みに北海道旅行から帰ってきたら、母が急に体調が悪くなったので入院することになったと私のアパートに父から電話がかかってきました。それからほんの2ヵ月足らずで母は胃癌のためこの世を去りました。残された家族のことを考え、大学卒業後は奈良に帰ることにしました。卒後臨床研修必修化前ですので、卒業までに入局先を決めなければなりません。内科医になりたいと漠然と思っていましたので、大学6年の夏休みに奈良県立医科大学の内科系を見学する予定で最初に第3内科(現消化器内科)を訪ねました。そこで出会ったのが当時教授であった辻井正先生でした。辻井先生から放たれるオーラは半端ではなく、先生がお話しになる第3内科学教室は希望に満ち溢れるものでした。ちょっと見学に行くつもりだったのが、辻井先生に出会った瞬間に入局を決めていました。この話を学生にすると、一瞬の出会いで将来が決まるほどの決断をしたことに、いつも驚かれます。

研修医時代

研修医1日目は、ようやく医師になれたワクワク感でいっぱい、医局の同期や先輩など新しい出会いがたくさんあり希望に満ちていました。医局の先輩達が最初に教えてくださったのは、「患者さんのところに1日に最低2回は行きなさい。」ということでした。毎日何回も患者さんのところに行って



研修医時代：辻井正先生と

話しているうちに、患者さんにとって孫くらいの歳の私を患者さんや家族が信用してくれ、頼ってくれるようになりました。辻井先生は、「内科医はまず患者さんの訴えをしっかりと聞かなければならない、患者さんの話のなかに診断のヒントがある。患者さんの話を聞かないと誤診や大事なことを見落とす。」と教えてくださいました。当時に比べて診断技術が目覚ましく進化している現在では、ともすれば患者さんの声を聴かず診察もしないでデータや画像だけで診断してしまう傾向があるように思います。私も含めて反省しなければなりません。

大学院時代

2年間の研修医修了後すぐに大学院に進学しました。そこで出会ったのが、研究を指導してくださった栗山茂樹先生でした。栗山先生は、私の大学院入学と同時に大学に戻ってこられました。医局会での栗山先生の最初の挨拶は「さあ！みんなでサイエンスしましょう！」でした。私にとってこれほど無限の可能性を感じるワクワクする言葉はありませんでした。大学院での私の研究テーマは、「肝細胞癌に対する遺伝子治療の基礎的研究」でした。昼間は大学病院で臨床の仕事をし、夕方から基礎研究をするという毎日で帰宅はいつも深夜、日が変わるのは当たり前でした。思うような結果が出ないことが多かったのですが、遺伝子治療で肝細胞癌の治療が進歩するかもしれないと思うとなぜか疲れを感じませんでした。栗山先生は研究のストラテジーの立て方、分子生物学的な実験のスキルなどを細やかに指導してくださいました。留学してもその経験が生かされましたし、今でもとても役に立っています。1994年に初めて海外の学会に参加しました。国際肝臓学会議 (IASL) で開催場所は、メキシコの Cancun というリゾート地でした。カリブ海にある大きなリゾートホテルで開催された学会にとっても感激し興奮しました。海外の学会に参加したことをきっかけに、学生時代から夢見ていた海外留学も夢でないかと思い始めました。



国際肝臓学会議 (IASL, Cancun, Mexico, 1994)
右から2番目：栗山茂樹先生

NIHへ留学が決定

大学院修了後は、関連病院へ出向しましたが、奈良県立医科大学の博士研究員として細々と基礎研究を続けていました。また、結婚、2回の出産と人生の大きなイベントが続き、仕事と育児を両立させながら、海外留学を夢見る日々を送っていました。夢に終わらせないために、研究の継続に加えて英会話の上達が必要と考えました。子供が小さく英会話教室に通うことが難しいため、外国人の家庭教師に家に来てもらっていました。夫も留学を希望していましたので、2人の留学先を一度に見つけることが難しく、5年の月日が流れました。と

ある日、現教授の吉治仁志先生から先生が留学されていたラボでポストを探しており、2人でも良いとの連絡をいただきました。あっという間に留学先が National Institutes of Health (NIH) に決まりました。夫婦で留学、しかも留学先は NIH の National Cancer Institute と夢のようなありがたいお話でした。



NIH：ラボのみんなと

留学生活

二人の子供は Executive Child Development Center (通称 ECDC) という NIH 付属の施設に通いましたので、安心して研究ができました。そこは、1カ月の赤ちゃんから幼稚園までの子供に加えて学童保育として小学校6年生までの児童が放課後にスクールバスで来ていました。私のボスである Thorgeirsson 博士は、夫婦ともに M.D. でそれぞれ NIH のラボのボスとして活躍されていました。二人のお子さんを育てながら夫婦ともに研究を継続され、私には理想的なご夫婦でした。私の研究のテーマは、「血管新生因子の役割」に関する研究で、TIMP-1 が血管新生に重要な役割を果たすことや VEGF-D が癌のサバイバル因子であることを報告しました。NIH は世界中の優れた研究者が集まっており、とても刺激になりました。M.D. を持たない PhD と一緒に働いたのは初めてで、PhD のなかにはすごく専門的なことに

こだわる人もいました。私は、「M.D. はアドバンテージ」であると思いました。M.D. だから臨床における課題がわかり、それは注目度が高い研究テーマになると感じました。NIH には大学生がアルバイトで研究の手伝いに来るサマースチューデント制度があります。Amy というとても優秀な女子学生が私の研究の手伝いをしてくれ、夏休みが終わってもずっと定期的に手伝いに来てくれました。日本にも同じような制度があればよいのと思いました。



サマースチューデントの Amy と

帰国後

帰国後は、育児と両立するために当直がない、on call でないことを条件に健診センターで働きました。そこでは、奈良女子大学生活環境学部と NAFLD の共同研究をしました。一緒に共同研究をした奈良女子大学の院生達は共同研究をテーマに学位を取得し、現在彼女らは



2015年 DDW の後、Thorgeirsson 博士の自宅にてご夫妻と



米国肝臓学会議 (AASLD, Washington DC. 2017) にて



米国肝臓学会議 (AASLD, San Francisco. 2018) にて奈良県立医科大学消化器内科のみんなと

大学の講師として活躍しています。海外の学会にも参加しました。海外の学会に参加すると、世界のエキスパートの講演を直接聞くことができる、世界での研究の流れがわかる、update な情報を得ることや注目されている研究分野を知ることで新しい研究テーマが思いつく、日本と世界の基準や常識の違いを実感できるなどたくさん学ぶことがあります。もちろん観光や美味しい食事を同じ研究グループの先生方と楽しむことも魅力です。2015年の DDW と 2017年の米国肝臓学会議 (AASLD) はワシントン D.C. で開催されましたので、その際に懐かしい Thorgeirsson 博士のお宅にお邪魔し食事をごちそうになりました。NIH で一緒だった研究者とも再会し楽しい時間を過ごしました。

人は財産

吉治教授に大学に異動するようにお声がけいただき、20年ぶりに大学に戻りました。奈良県肝疾患相談センター専従医師を兼務し、奈良県肝炎医療コーディネーター (Co) の養成や Co 活動の支援を通じて、県内のたくさんの医療従事者ともかかわっています。

恩師の辻井先生や栗山先生は他界され、もうご指導いただくことはできませんが、先生方に教わったことを引き継いで後輩を指導していきたいと思っています。この30年間いろいろな方に支えていただきました。人との出会い、結び付きは私にとっては財産です。これからもたくさんの方々に出会おうと思いますが、大事にしたいと思っています。